

さよならMさん

野母とし子

「治療はしないわ。」病院で肝臓がんの余命宣告を受けた時、しっかりとした口調で言った。それから15ヶ月、とうとう逝ってしまった。

壮絶な毎日だったのに、いつもよく通る声で、しっかりと話すので、「どこが悪いの？」と思われるのが常だった。

同居していた息子さんが、口論の末、家を出ていったあと、一人暮らしも慣れたころ、「私が出て行けと言ったのよ。仕方ないね。」と言った。

病気と孤独と経済の心配と不安があっても、自宅を訪れる人にきちんと礼を尽くし、人の気をそらさないようにとしゃべるので、人が帰った後、「疲れるのよね。」とよく言った。

最後の入院の時、救急車で、到着した病院でストレッチャーの上で「Mです、よろしくお願いします。」とはっきり言った。又、そのまま転院した病院でも同様だった。

口の達者な人だった。自分の気持ちをストレートに発するので彼女の口害に遭遇した人もあった。人を許すとか寛容さよりも素直さが印象に残る人だった。故郷の自然を懐かしみ、屋外に出られなくなってからは、パソコンの画面でその土地、その土地を映し、それをたどって旅行をしている気分を楽しんでいた。

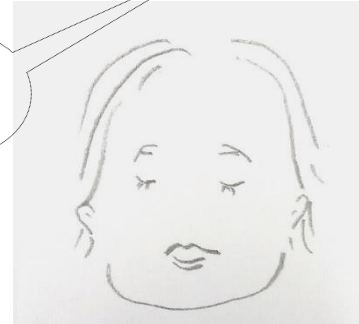
今年の夏頃、かなりの食器を捨てた。「もう使わないものは処分するの。こんなもの貰ってくれる人もいないし。」と言いながら、杖をつきながらビニール袋に入れていた。

毎朝、お仏壇のご主人にご飯を備えて、夕食には自分で食べていた。ある時、「結婚してすぐの時、主人に『俺に食わせてもらおうと思うな。』』と言われたけど「私の人生は本当にそうだったわ。」と言った。何かの会話の中での言葉だと想像するが、Mさんにとって、ショックだったと思うけど、晩年そのような形でご主人の言葉を懐かしんでいた。

結婚後も資格を活かして働き、50才台で脳梗塞を患ったご主人を看病しながら働き、Mさんも体調を壊して、ご主人と同じ病院に入院したこともあった。ご主人を送った後、今度は自分自身の闘病が始まった。

何回目かの退院の時、前日に看護師さんにお礼をしたいから菓子折りを買ってきてと頼まれた。病院を出たのが夕方6:00過ぎていたので、7:00に病院の玄関が閉まるので、私は急いだ。しかし、戻るときは7:30を過ぎていた。玄関は閉まっているし、どこから入るのかなと思って、到着すると、なんと、玄関の

Mさん
の顔



ガラスの向こうに寒いのに病衣のままの車椅子の彼女が白い顔をして待っていた。守衛さんが玄関を閉めないように、そこに居たのだ。

ある日、「こんなのなら死にたい」と言った。余命宣告が1年だったので、それに合わせるように生計を立てたが、お金がなくなったのだ。彼女の描いた日々とは違ったかもしれないが、不足の分は生活保護を受けた。

「生活保護だとこんな目に逢うのか。」と言うこともあり、ひがみと情けなさともまじりあって混乱することもあった。

しかし、よく通る声で話すので、「人はわたしのことを元気と思うみたい。」と言っていたMさん。

Mさんはきっと「元気なMさん」を楽しんでいたに違いない